

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 20 日現在

機関番号：31306

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21700720

研究課題名（和文） 仙台型染めの研究—仙台浴衣、仙台手拭い—

研究課題名（英文） The study of Japanese stencil resist dyeing in Sendai

研究代表者

川又 勝子（KAWAMATA SHOKO）

東北生活文化大学・家政学部・講師

研究者番号：50347910

研究成果の概要（和文）：かつて仙台地方で隆盛した型染めである注染による浴衣・手拭いの資料を調査・収集し、これら文様の電子保存と、破損文様の電子的修復を試み、591 枚の型紙文様を収録することができた。さらに染見本や、手拭い図案カード等 771 種類の文様も電子保存し『仙台型染資料集Ⅳ～Ⅵ』を作成したことで、これまで散逸していた仙台地方の伝統染色に関する資料を集約することができた。これら文様は、型紙の復刻やデジタルプリント等へも応用できる。

研究成果の概要（英文）：This study have been performed to investigate and to collect the materials were used to dye the *yukata* and the *tenugui* by “*Chusen*” which were ever practiced at skilled dye houses in Sendai flourishingly. The digital conservations of 591 paper patterns and the digital restorations of the breakage pattern were carried out. Furthermore, the dyeing samples and *tenugui* design cards of 771 kinds have been digitally conserved. And the three documents of collected dyed goods were printed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：生活文化、工芸染色、型染め、手拭い、浴衣、デジタル化処理

1. 研究開始当初の背景

仙台地方の染色業は、明治期から昭和 40 年代にかけて栄えたが、当時の特産品として二つの特徴ある型染めがあった。一つは明治期から大正期にかけて生産された常盤紺形であり、もう一つは常盤紺形の衰退後、注染という当時の大量染色法で染められた浴衣・手拭いであった。常盤紺形は、日本の伝統的な緋、縞、絞りの「染め・織物文様」

を「木綿型染め」によって表現した仙台地方に特有の木綿型染物であった。この常盤紺形によって堅牢度の高い廉価な着尺地などが庶民に広く用いられるようになった。しかし、時代の変化に伴い、仙台地方の染色業は次第に衰微し、多くの染色工場は転業や廃業に追い込まれ、常盤紺形染めや染色に用いられた型紙(常盤紺型)は散逸してしまった。現在は常盤紺形について知る人は殆どなくなり、そ

の型紙などの資料も仙台市博物館や民間の数か所に所蔵されているに過ぎない。さらにそれらは相当に劣化が進んでいるために、容易に取り扱うことはできない。したがって、これらの文様をコンピュータを用いて収録し、仙台地方独特の伝統型染め資料として保存することは文化遺産の観点からも極めて重要な課題である。

筆者が所属していた研究室では、1995年頃から、常盤紺型の電子的保存法について検討してきた。筆者はその研究を引き継ぎさらに発展させて、平成18年度～20年度の文部科学省科学研究費補助金(若手研究(B)、課題番号:18700576)の交付を受け、これまでに電子収録してきた常盤紺型文様と新たに収録した文様、常盤紺形染見本等、計1142点を整理・分類し、型紙資料集の書籍と電子書籍としてまとめることができた。

常盤紺形染めが衰退してから、仙台の型染めは浴衣や手拭いの染色へと移行した。これは需要の増大とともに大量に染められる注染技術の発展が大きな要因になっており、東北から北海道にかけて広く販売・使用されていた。しかし、生活の洋式化が進展するにつれて、手拭い・浴衣の需要は昭和50年以降に次第に後退していった。手拭い・浴衣についても当時の状況は資料が整理されていないこともあって、全く把握されていなかったが、これまでに、浴衣端切れ77枚、手拭い染見本321枚、浴衣・手拭い染色に用いられた注染用型紙(以下、注染用型紙)412枚について、前述した科学研究費補助金で購入した機材で電子保存を行うことができた。現在も調査を継続中であるが、新たに1,000枚以上の注染用型紙を見出した。

これらの仙台地方の伝統型染めの資料を保存し、その伝統文化・技術を後世に伝えることは研究者の責務でもある。また、近年地方の時代ともいわれ地域文化や地場産業の振興も求められている。また、20～40代の女性を中心に、和服の人氣が復活している。実際に和服を着用しないまでも、手拭いや袋物など、形態やデザインに和風意匠を取り入れた小物や雑貨を使用する若者も増加している。近い将来、仙台の伝統工芸品・民芸品として復活することも視野に入れて、電子保存から製品製作までの工程の研究も検討している。

2. 研究の目的

これまでに、常盤紺型の資料整理と電子保存はほぼ終了している。しかし、注染用型紙については、電子保存は着実に進んでいるが、電子保存後のパソコンを用いた破損箇所の修復作業は十分に進んでいない。そこで本研究期間中に、これまでに収録した注染用型紙の文様修復と、平成20年に新たに見出した

注染用型紙の調査と電子保存、整理・分類、破損箇所のデジタル修復を行うことを目的とする。

注染用型紙も常盤紺型同様、半世紀以上の長期にわたり放置されていたため破損箇所も多く、今後も劣化が進んでいくことは確実である。できるだけ早い段階でこれらの資料をデジタルデータ化し整理・保存するとともに、破損箇所については、パソコン上で修復して保存する。さらに、『常盤紺型資料集』と同様に、型紙資料集とその電子書籍を作成する。型紙の調査は、①型紙寸法の計測、②おおまかな文様の分類(植物、動物、器物、天地など) ③文様の種類別分類(各分野の文様をさらに細かく分類し、文様名を特定する)などについて行い、これまでに調査している浴衣端切れと手拭い染見本、注染用型紙と併せて整理し、仙台型染めのデータベース化を進める。

一方、これらのデータを基に、パソコン制御の自動カッターを用いての型紙作成も続けて行う。はじめに、貴重な型紙文様や代表的な文様の型紙製作を進める。このことによって、型紙文様電子保存→型紙製作→染色→製品の工程を再検討し、地場産業への展開の可能性について検討する。

3. 研究の方法

(1) 常盤紺形染の調査

新たな常盤紺形染関連資料の所在調査を試みた。また、これまでに電子保存した常盤紺型画像を基に文様の分類を行い、特徴的な文様を抽出し、染色工場ごとの文様の違いを比較した。

(2) 仙台地方の注染型染めの調査と型紙の電子保存

① 資料収集：調査対象の名取屋染工場(仙台市青葉区)より、注染に関わる資料(染見本、型紙、その他)を収集し、計測、破損箇所等の調査を行うとともに、仙台地方における注染の経緯についても調査を試みた。

② 注染用型紙の電子保存：浴衣・手拭いを染色するために用いられた注染用型紙をイメージスキャナを用いて4分割スキャニングし電子保存した。その後、汎用画像処理ソフトにより1枚の型紙画像に合成・保存した。

③ 型紙文様の電子修復：破損した文様については、同上のソフトを用いてデジタル修復を行った。これはデータベース作成のための画像ともなる。さらに、代表的文様については、パソコン制御自動カッターを用いて型紙を再生するためのベクトルグラフィック画像も作成した。

④ 染見本等の実物資料の電子保存：資料の形状により、デジタルカメラ撮影または、スキャニングによる電子保存を試みた。

⑤ 型紙資料集作成：②～④で作成した電子資料を基に、注染用型紙資料集の書籍と電子書籍(PDF形式)とを作成した(汎用パブリッシュソフト使用)。また、保存画像を活用し、新たな型紙文様について検討した。

4. 研究成果

(1) 常盤紺型の調査

本研究期間に、新たな常盤紺形染と常盤紺型染に用いられた型紙(筆者らは常盤紺型と呼称)等関連資料の所在調査を試みた結果、3枚5柄の染見本と、6枚の常盤紺型(図1)、出品目録(大正4年)が見出された。いずれも常盤紺形染を考案した最上染工場由来の資料である。他にも、常盤紺形染に類似した藍型染め端切れが見られたが、常盤紺形染と特定するに至らなかった。これらが見出された時期が研究期間の終了間際だったため、電子保存と型紙復刻については今後の課題とすることとした。

また、これまでに収集した常盤紺型文様の文様上の特徴である絵紺文様、絞り文様、中形文様(紺・絞り文様を除く)について、比較検討を行った。その結果、絵紺文様型紙については最上染工場由来常盤紺型(以下最上屋型紙)では8.2%、名取屋染工場由来常盤紺型(以下名取屋型紙)では14.3%残されていた。絞り文様型紙では、最上屋型紙は6.4%であったのに対し、名取屋型紙は36.7%であった。中形文様については、最上屋型紙は6.0%、名取屋型紙では8.0%であった。全体的に比較すると、最上屋由来型紙では紺割付や小紋などの文様が多く残されていたのに対し、名取屋型紙では絵画的な文様が多く残されていた。染色工場により得意とする文様があったことが示唆された。しかし、聞き取り調査の結果、ある染工場では破損や劣化の著しい常盤紺型はすべて廃棄したということであった。そのため、最上、名取屋両染工場でも、大部分の型紙が廃棄された事が推察され、一概に染工場ごとの特徴とは断定できなかった。

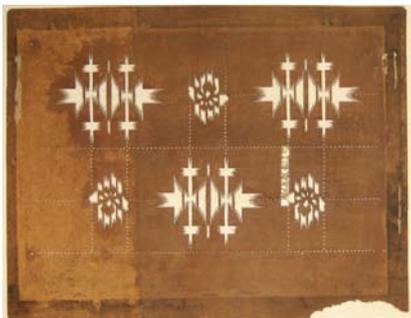


図1. 紺割付文様常盤紺型(最上染工場由来)

(2) 仙台地方の注染型染めの調査と型紙の電子保存の結果

① 仙台地方における注染

明治末期に実用化された当時の手拭い・浴衣の大量染色法である注染により、浴衣や手拭いが量産されるようになったが、仙台における注染の始まりは大正中期頃である。仙台地方は、江戸期より染色が産業として根付いていたが、明治末期頃になると、染色業全体が衰退しつつあった。そのために、名取屋染工場の二代目社長佐々木栄治氏が東京・大阪にて染色技術の指導を受けた。佐々木氏の帰仙後、名取屋染工場が注染を導入したことが、仙台地方の注染染物生産の始まりであるということが、今回の調査より明らかになった。また、佐々木氏が、仙台市内の染物組合全体の復興を図るために市内の他の染工場に注染の技術指導を行ったことで、注染が仙台地方に広められた。

当時の注染は、現在のようなコンプレッサーで染料を吸引する形態ではなく、「ラッパ」と呼ばれた吹き付け器具を口で吹いたり、鞆(ふいご)を用いたりして生地の上から染料を吹き込む方法で染色がされていた。この古い形態の注染を名取屋染工場ではおよそ昭和30年頃まで続けていたということである。

② 調査資料の収集

注染に関する資料として、注染用型紙527枚、手拭い染見本288枚、手拭い図案カード95枚、手拭い商品目録2冊(284柄)、特選見本帖1冊(昭和卅年拾月東京手拭競技会入賞柄並優秀柄、104柄の実物手拭い)の文様を収集することができた。いずれも、仙台地方で初めて注染を導入した名取屋染工場より借用した資料である。

手拭い図案カードは、手拭いの完成図案を描いたと思われる長方形の画用紙であり、染色する図柄の基本となる文字や絵柄が描かれている。手拭いの実寸の縮尺にはなっていないが、この図案に従って、下絵師が注染用型紙の下絵を描き、その下絵に沿って型彫師が型紙を彫り、最後に染師が染色を施したということが推測できる。伝統的な呼称や正式な呼称は明らかにできなかったが、現在ではこの資料の存在を知っている染色家や専門家がほとんどおらず、それだけに貴重な資料と位置付けられる。また、手拭い商品目録のうち『壽々樂武』は昭和25年に浜松で発行されたものであったが、『みやぎの』は名取屋染工場発行のものである。発行年は明らかにできなかったが、仙台の手拭い染色の最盛期と言われる昭和20年代後半～30年代に発行されたものだと考えられる。

② 注染用型紙の調査と電子保存

今回収集し、電子保存から電子修復までを

行う事ができた注染用型紙は、277 枚であったが、それらのうち 116 枚(41.9%)に、破れ、欠損、折れ曲がり等の破損が見られた(図 2)。また、現段階で破損は見られなかったものの、著しく劣化している型紙も見られた。これらのうち、スキヤニングが困難なものに関しては、所有者の許可を得て、僅かに加水し加圧するフラットニングと、紙資料修復用和紙テープを用いた補強を施した。また、注染用型紙は着尺用の型紙よりも大型であるため、4 分割スキヤンを試みた。その後、汎用フォトレタッチソフトを用いて繋ぎ合わせた。また、同ソフトを用いて、欠損箇所、歪み部分の電子的修復を試み、概ね良好な成果を得ることができた。この電子的修復は、本研究期間以前に電子保存のみを行っていた型紙文様に対しても行い、合わせて 594 枚の修復画像を作成することができた。



図 2. 破損型紙の一部分(檜扇文様浴衣型紙)

また、電子修復が完了した型紙文様を用途別に型紙を分類すると、営業目的など宣伝用に使用・頒布することを目的とした名入れ型紙が 246 枚(41.4%)であった。また、その内の 207 枚(84.1%)が浴衣用の模様付けであった。現在仙台地方では、浴衣の染色は殆ど行われておらず、注染による染色は手拭いが主流となっているが、昭和 20 年代後半から昭和 30 年代にかけての仙台地方での注染隆盛期には、名入れ浴衣が多数染められていたことが分かった。また、名入れ浴衣の文様について検討した結果、注文者や使用者の生活や文化を反映するものであり、その美的感性が示されていた。特に、漁業が発展した地域柄もあるため、漁船の進水を祝い大漁を願う漁業関連の浴衣を染めた型紙が多数見られ、祝進水などの文字に加え、波紋や青海波文様、波に千鳥、帆掛船、魚等の文様を美しく組み合わせ合わせた型紙が多数見られた(図 2、図 3)。

一方で、名入れ浴衣が多数生産された同じ時代には、名入れ部分の見られない絵柄浴衣も生産されていた。絵柄浴衣は、名入れ浴衣とはまた違った意味で、かつての仙台地方の庶民の生活や染織文化を物語るものであり、現存する浴衣が殆ど見られなくなった現在では、絵柄浴衣型紙も重要な資料である。絵

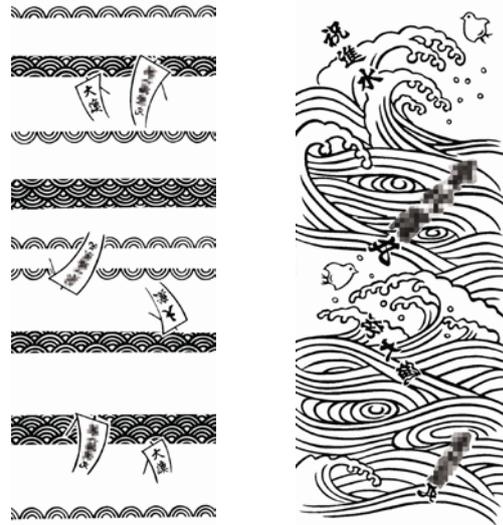


図 3. 青海波に帆文様名入れ浴衣型紙(左)

図 4. 波に千鳥文様名入れ浴衣型紙(右)

注) 図 3、4 は『仙台型染資料集Ⅴ』より抜粋。電子修復等の処理済み。

柄浴衣の文様は、名入れ浴衣の文様とは異なり、いわゆる花鳥風月文様が多いと予測していたが、器物文様や天地理文様、割付文様など様々な文様が工夫されて表現されていた。特に、夏に涼を感じさせるためか植物文様が多数見られた。現在市販されている浴衣地は、コンピュータグラフィックと連結したプリント方法で作成されているものも多くなった。これら新しい方法で得られる浴衣文様は、複雑な文様と多彩な色彩が特徴であり、かつて注染で染められた浴衣の文様とは異なる美しさが表現されている。染色方法の発展により、注染浴衣ならではの日本の伝統的文様を纏う浴衣は次第に減少してしまっただが、今回のような伝統的浴衣文様の保存と活用の重要性も示唆された。

③ 染見本等の子保存

手拭い染見本 228 枚と特選見本帖 104 枚の手拭い染見本は布地の資料であるため、デジタルカメラによる撮影(RAW 形式)を行うことで文様の電子保存を行い、汎用フォトレタッチソフトを用いて現像を行った。また、手拭い図案カードと商品目録については、スキヤニングにより電子保存を行った。

④ 電子データの活用

型紙文様の活用方法の一つとして、型紙文様データベースとしての『仙台型染資料集Ⅳ～Ⅵ』を作成し、印刷・製本した。収録内容は、本研究期間内に電子保存と電子修復を施した注染型紙文様 277 枚と、これまでに電子保存のみを行っていた注染型紙文様とを合わせた 591 枚、手拭い染見本 288 枚、特選見本帖 104 柄、手拭い商品目録 2 冊である。

資料集を作成したことで、これまで現状が明らかにされていなかった地域の伝統型染めである注染の資料を保存し、その伝統文化・技術を後世に伝えることが可能である。

また、デジタルプリントシステムを活用したテキスタイルデザインを行い、新しい技術と現代の感性を活かした型染め文様のデザインを試みた。特に、大学生 15 名の協力を得て、伝統文様に若者の感覚を活かした手拭いのデザインを試みた。取り組み後のアンケートの結果は概ね好評であったため、大学生のみならず、一般市民に地域の伝統染色の新たな可能性について周知する方法として今後発展させる。

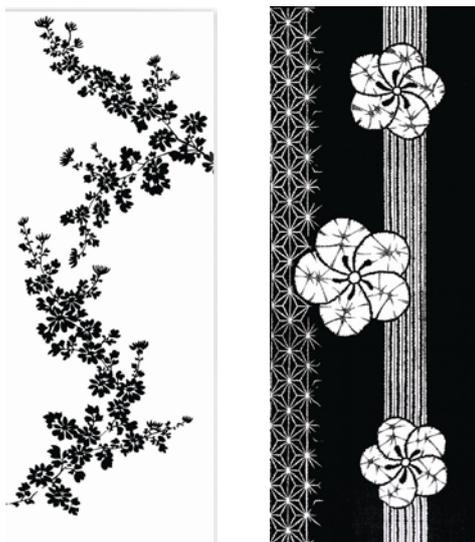


図 5. 枝菊文様浴衣型紙(左)

図 6. 振り梅に朝の葉繁ぎと縞文様浴衣型紙(右)

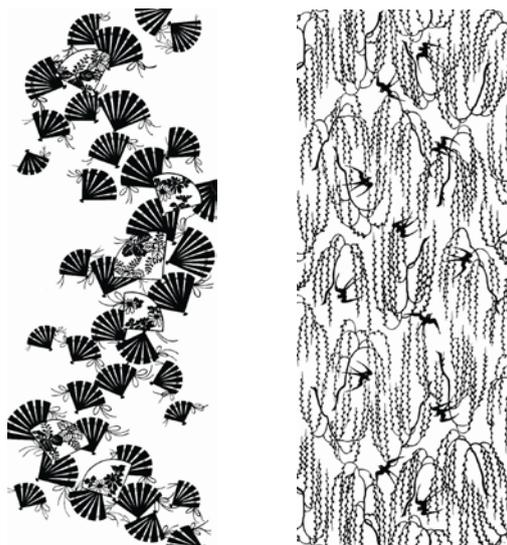


図 7. 檜扇文様浴衣型紙(左、図 2 の破損箇所を電子的修復)

図 8. 柳に燕文様浴衣型紙

注) 図 5~8 は『仙台型紙資料集VI』より抜粋。電子修復等の処理済み。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

- ① 川又勝子、佐々木栄一、常盤紺型の文様—中形について—、東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学部紀要、査読無、42 巻、2012、31-35
- ② 川又勝子、佐々木栄一、常盤紺型の文様—絞り文様について—、東北生活文化大学東北生活文化大学短期大学部紀要、査読無、41 巻、2011、79-83
- ③ 川又勝子、佐々木栄一、常盤紺型の文様—絵絣文様について—、東北生活文化大学東北生活文化大学短期大学部紀要、査読無、40 巻、2010、49-53

〔学会発表〕(計 9 件)

- ① 川又勝子、佐々木栄一、型紙のデジタル化処理 その 14 —仙台浴衣と仙台手拭について—、日本家政学会第 64 回大会、2012 年 5 月 12 日、大阪市立大学(大阪府)
- ② 川又勝子、佐々木栄一、常盤紺型の文様—中形について—、日本家政学会東北・北海道支部第 56 回研究発表会、2011 年 9 月 17 日、山形大学(山形県)
- ③ 佐々木栄一、川又勝子、仙台地方の型染めに関するデジタル・アーカイブ(その 2)、日本家政学会東北・北海道支部第 56 回研究発表会、2011 年 9 月 17 日、山形大学(山形県)
- ④ 川又勝子、佐々木栄一、型紙のデジタル化処理 その 13 —仙台浴衣と仙台手拭について—、日本家政学会第 63 回大会、2011 年 5 月 29 日、和洋女子大学(千葉県)
- ⑤ 川又勝子、佐々木栄一、常盤紺型の文様—絵絞り文様について—、日本家政学会東北・北海道支部第 55 回研究発表会、2010 年 9 月 11 日、岩手大学(岩手県)
- ⑥ 佐々木栄一、川又勝子、仙台地方の型染めに関するデジタル・アーカイブ、日本家政学会東北・北海道支部第 55 回研究発表会、2010 年 9 月 11 日、岩手大学(岩手県)
- ⑦ 川又勝子、佐々木栄一、型紙のデジタル化処理 その 12—仙台浴衣と仙台手拭について—、日本家政学会第 62 回大会、2010 年 5 月 29 日、広島大学(広島県)
- ⑧ 川又勝子、佐々木栄一、常盤紺型の文様—絵絣文様について—、日本家政学会東北北海道支部第 54 回研究発表会、2009 年 9 月 12 日、藤女子大学(北海道)
- ⑨ 川又勝子、佐々木栄一、型紙文様のデジタル保存 —仙台地方の木綿染めの型紙文様—、文化財保存修復学会第 31 回大会、

2009年6月14日、倉敷市芸文館(岡山県)

[図書] (計3件)

- ① 川又勝子、佐々木栄一、仙台型染資料集
VI—仙台地方の注染型紙—、2012、全85
頁
- ② 川又勝子、佐々木栄一、仙台型染資料集
V —仙台地方の注染染物—、2011、全
104頁
- ③ 川又勝子、佐々木栄一、仙台型染資料集
IV—仙台地方の注染染物 手拭—、2010、
全147頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川又勝子 (KAWAMATA SHOKO)

東北生活文化大学・講師

研究者番号：50347910

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

佐々木栄一 (SASAKI EHICHI)

宮城教育大学・名誉教授